

バッタ・ジャヤンタ作『聖典騒動』序幕・第一幕¹

和訳：片岡 啓
(東京大学東洋文化研究所)

全四幕の登場人物

1. 座長
2. 座長の助手
3. 仏教僧ダルモッタラ
4. その弟子の信徒
5. スナータカのサンカルシャナ、ミーマーンサー学者で王の臣下
6. その弟子の少年
7. ヴィシュヴァルーパーとその他の審判者
8. サンカルシャナの召使
9. ジャイナ教の修道士

1) ここに訳出するのは、後九世紀カシミールのニヤーヤ学者 Bhaṭṭa Jayanta の手になる戯曲 *Āgamaḍambara* の序幕・第一幕相当部分である。本章訳出にあたっては、Csaba Dezsö 氏 (Assistant Lecturer, Department of Indo-European Studies, Eötvös Loránd University, Budapest) による批判校訂テキスト (Oxford 大学提出予定の博士論文) を底本とした。未出版原稿の使用を快諾された氏に感謝する。また、氏による英訳および注記も参照しえた。重ねて厚意に感謝する。氏の批判校訂テキストは、V. Raghavan & Anantatal Thakur による旧校訂本 (*Āgamaḍambara Otherwise Called Śaṅmatanāṭaka of Jayanta Bhaṭṭa*. Darbhanga: Mithila Institute, 1964) を、両氏が用いたのと同じ二写本に基づいて、再校訂したものである。

和訳にあたり注記は最小限に留めた。著者ジャヤンタの名著 *Nyāyamañjarī* に見出される対応箇所、関連する仏教論理学派の出典その他、原典とその解釈に関わる注記については Dezsö 氏による後日の公刊を期す。また旧本の序文に Raghavan による解説がある (本書後出)。併せて参照されたい。最後に、京都大学でのセミナーの前後を通じ、訳者の疑問に答えていただいた Harunaga Isaacson 教授 (University of Pennsylvania) に感謝する。

10. ジャイナ教の修道女
11. ジャイナ教の修道院長ジナラクシタ
12. 修道院長の弟子たち
13. 苦行者ジナビクシュ
14. ニーラーンバラ派のカップルたち
15. 墮落したシヴァ派の苦行者カンカーラケートゥ
16. 墮落したシヴァ派の苦行者シュマシャナブーティ
17. 臣下
18. シヴァ道場の師匠聖ダルマシヴァ
19. シヴァ道場の苦行者
20. チャールヴァーカ（唯物論者）の無神論者グリッダーンピ
21. ヴェーダ伝統主義者の祭官
22. ヴェーダ伝統主義者の先生
23. 首相マンジロー
24. ニヤーヤ学の師匠ダーイルヤラーシ、別名サーハタ先生
25. パーンチャラートラ派ほかの論者多数

（序幕）

そのおかげで無始なる無明が順次に消滅し、そこにおいて強烈で新鮮な喜びが現れだす、かのブラフマンが君達に輝きだすように、それ（ブラフマン）が意識の位に降臨し始めるやいなや、[そのブラフマン] 以外の欲求対象を享受しようとする諸欲が消滅するところの [かのブラフマンが]。

祈祷頌が終わって座長 ああ全く、役者稼業というのは最低の何か [ひどい物]、目に余る詐欺仕事の騒動がいつも繰り返される、家族を支える手立てでございます。

シヴァにヴィシュヌにブラフマー、聖者に王様、野卑な畜生に道楽者、臆病者に勇者、心悦ぶ人に苦悩の人。これら全ての役に触れながら、人々への恥も知らずに過ごしてい

る。役者は実のところ、腹を保つがために芸に依る者。

それなら、実りは少ない、苦勞は多い、ひどい羞恥のもととなる、こんな悪芸なぞ畳んでしまって、どこかの庵のどこかグルの家にお仕えして、《一切の苦しみの止滅》である《人の最高の目的》（解脱）に赴くがために努力したほうがましというもの。

考えて さて、憐憫の器（哀れむべき者）に変わりなきこの哀れな家族（妻）というお荷物、どこに預けてから立ち去るべきか。

前を見て まあいい。まずは、こいつの考えを知るとしよう。

助手登場，座長を見て どうしてこの人，今日は，嫌気のためにすっかり顔も萎れたかのように見えるのだろう。彼に聞いて見るとしよう。

近づいて 先生，どうしてこんな落ち込んだ顔をしているのですか。註作者（ジャヤンタ）の弟子達に何かするよう命じられたんじゃないですか。

座長，前に言った「努力したほうが（ましというもの）」までを読む

助手 詮無いことに嫌気は沢山。神々にせよ人間にせよ畜生にせよ、いったい誰が詐欺の行いを離れて《最高の目的》（解脱）に行き着いたというのですか。ブラフマーを始め畜生に終わるこの生類の群れは、残らずみんな、輪廻の中をただ幻影のせいでぐるぐる回っているのです。あなたに何かそれ以上のものが生じた〔とでも言うのです〕か。

幻影に騙されている一切世間，その営為は真実ではない。
同じことが我々にもあてはまりましょう。

座長 きみ，君の言うとおりで。しかしだ，そういうものだとしても我々のこの営為というのはやっつけていけるものじゃないんだよ。

助手 先生、どうしてですか。

座長 きみ、バラタ仙が説いた十[の様式]の劇を上演するため苦労しているのが我々というもの。しかし、今日、幼くして既に文法学(パーニニのアシュターディヤーイー)の注釈を作って「註作者」という通称で有名なパッタ・ジャヤンタ様,[その彼の]弟子衆に私が命じられたのだ。「我らが先生の作品で新たに『聖典騒動』なる素晴らしい劇がある,それを上演せよ」と。しかし、これは現実に即しているわけでもなく,かといって理論に則っているわけでもないという,これまで上演されたことがないようなもの,どうやって上演すればよいものか。だから,こんなひどい生計[の途]は無視したほうがましというもの。

助手 先生,そんなことをしてはいけません。知っての通り,その命に背いてはいけないのが註作者の弟子の方々。で,理論に則っていないと心配なさっていますが,その点,上演する側に何の咎がありましか。

かの詩人(ジャヤンタ)がバラタ[仙]の教えを無視して詩を作り,そして,彼の弟子達はそのまま広めてしまう。あなたの観衆は同じ彼等なのです。あなたは上演すべきです。脇の他人が何を言いふらす[というの]でしょうか。

座長 人々の非難はどうでもいい。

助手 では,王からの脅威を心配なさっているのですか。

座長,微笑して それもない。

助手 では何をぐずぐずしているのです。仏教徒やジャイナ教徒といった役のそれぞれに役者達を振り分けてください。

座長 きみ,トリックとまやかに満ちたこの耐え難い役者稼業を続けていくことが私にはもうできないんだ。

詩が理論に則っていまいが則ていようが、どうでもいい。
人々が怒ろうが感動しようがどうでもよい。私は心が倦ん
でいるのだから、自分の仕事を放棄して、まずは諸聖地を
巡ろう²

で、君は私の哀れな家族（妻）を支えてくれ。そうでなければ私につ
いて来い。しかし私はと言えば、欲望を離れた何百の僧の占める、程遠
くない（近道の）涅槃道を説くこの壮大な僧院に、真理の求道者として
今まさに入らねばならない。

と言って両者退場

序幕〔終了〕

2) cinomi, 直訳は「積もう」。

(第一幕)

次に坐の上にいる赤衣をまとった仏教僧が登場。また信徒が前に。

僧，離欲の風で

ああ、始まりなき輪廻におけるこれぞ定め。心の惑乱した生類は生まれては死に、そして死んでも生まれる。これこそ苦の道と正しく思い至って、生死の断滅した位へと賢者は心を向けるべし。

信徒 大徳様、いったい生死世俗の外にあるその位とは何なのですか、また、いかなる手立てでもってそこに到達するのでしょうか。

僧 賢き者よ、もし聞きたいのであれば、ここでは四聖諦をよく知ることにより努力を向けよ。

信徒 大徳よ、では、その四聖諦とは何なのですか。

僧 賢き者よ、苦、集、滅、道というのが四つの聖なる諦である。

信徒 大徳よ、これだけでは私に覚知は生じてきません。どうぞ細かく教えてください。

僧 君よ、分からせてあげよう。

まず第一に、自ずから[心のうちに]意識され、楽とは異なるものが《苦》であり、一切のものである。いっぽう、その[苦の]生起してくるもととなるもの、それが《集》であり、迷妄の偉大[な力]である。《滅》とは涅槃、一切の苦の止滅である。その[滅]を得るがための手段を、知恵優れたる者達は《道》と呼ぶ。

(信徒) 大徳よ、では、いかなる手段によって、アートマンは、長き

[に渡って] 連綿と働いている渡りがたいこの《苦の深み》を離れて、涅槃に住するのでしょうか。

僧 正しき者よ、お前は正しく分かってはいない。実際の所、苦境を超えて涅槃に到達するような、アートマンなる何者かがあるわけではないのだ。そうではなく、

過酷な苦勞を強いる輪廻という牢獄の、これこそ堅固な柱
すなわち、人々の堅固な我執である。

すなわち、

「これが私だ」と常に見ている生類には、必ずや「これは私のだ」という思いが生じる。「私」「私の」と理解する智愚鈍の者は決して悪しき渴望を捨て去らない。渴望を取り去っていない者にとり離欲の修習はほど遠い。そして、離欲を訓練せずして輪廻を渡ることがどうしてあろう。

信徒 大徳よ、まずもって、アートマンなる何者も全く存在しないのだとすれば、いったい誰が輪廻における苦を経験するのでしょうか。また、誰が、この[輪廻] を渡り超えて、涅槃という住居に辿り着くのでしょうか。

僧、微笑して 愛児よ、滅、涅槃、解脱、終着というのは、アートマンが常住だとしても、ますますもってありえないのだ。というのも、常住なものが滅することはありえないからだ。したがって、この一切は唯識に他ならず、[その認識が] 喜びや落胆といった多くの相に汚された、始まりなき連続によって働いている様々な潜在印象に応じて到来した広き《形象の相違》をとるのだが、無我等を修習するこの道により、様々な偶有的な覆いをもたらした様々な形象という汚れを離れることで、無垢なる意識のみに定まり、[心の] 連続体として存続する。あるいは、連続そのものが断たれる。以上、これこそが涅槃への最たる近道。

信徒 大徳よ、存続するアートマンが存在しないならば、来世で誰が行為 [の果報] を享受するのでしょうか。今現在でも、誰が、想起に基づく活動を持つのでしょうか。

僧 よく分からせてあげよう。

常住な存在というのは、繼起的にせよ非繼起的（一度）にせよ、効果的作用の手段たりえない。そして、効果的作用を何もなさない以上、これらは《真の存在》ではない。

なぜなら、教義に通じた者達は次のように説いているからである。

効果的作用をなすもののみが真に存在するものである。

と。さらにまた、

滅する本性を有するにせよそうでないにせよ、これなる瓶が、ハンマー等という原因のせいで滅するということはない。[滅するものであるならば] その原因 [であるハンマー等] は無駄となろう。あるいは [滅するものでないならば、ハンマー等は壊し] 得ないということになろう。あるいは、一劫経ってもこれ（原因であるハンマー等）は到来しないので、滅しないことになろう。

それゆえ、自体を獲得した直後のみに存在というのは滅するのである。同じように [存続しているかのよう] 見えるのは、似た連続体を有しているからである。また、連続体の働きに依拠することで、《行為主体・享受主体》や《想起等》に関わる結果が起きることも、論拠づけられないことはない。

信徒 存在群一切が刹那に滅するならば この [存在群] が第二の刹那まで存続するということが決していないならば どうやって、この

[存在群]を認識は対象とすることができるのでしょうか。ご存知のように、対象というのは、認識と同時に、あるいは、[一瞬]後に、その[認識]によって輝きださせられます。あるいは、[対象が]認識を生じさせるにしても[そのような対象を]、それ（認識）は [対象による]制約³あるいは[対象の]形象に達することなくしては 対象とすることはない[はずです]。それ以外の仕方では、刹那に存在するものをこのように知覚することはありえない[はずです]。

僧 きみ、もし君が明らかに見るならば、認識の対象となるような「対象」（外界実在）と言われるものは何もないのだ。この認識のみが青・黄といった形象に彩られて現れてくるのである。どうしてか[という]と、

【問】世間において、二つの形象に依拠して、同時に、認識と対象とが認識されることはない⁴。また、無情[な物質]である対象は、輝き出し（精神）を体とする認識によって把握されるのだ。

【答】というならば、灯火と同じく、最初に[輝き出させる主体である]把握（認識それ自体）の方が[把握される]はずである。そして、形象を持たないまま[把握主体である認識が]把握されることはない。それゆえ、認識それだけが様々な形象をもって現れるのであって、他に[外界]対象がどうして[あろうか]。

したがって、一切は空、一切は刹那的、一切は無我。一切は苦。と、このように瞑想して、涅槃に[人は]到達する。

裏手から時を告げる鐘板の音

3) 旧校訂本では *viñā ñāṃtaṇa* と読むが、二写本は *viñāṇiattane*。ひとまず現在の Dezsö 氏の推測である *vi ño ñāṃtaṇaṃ* に従って訳出するが、改善の余地なしとしない。

4) 認識の形象と対象の形象という二つの形象が同時に認識されることはない。

信徒、**聞いてから** 大徳様、ご存知のように、今聞こえたのは、一切の僧の集団が集まる時（昼食の時）を告げる鐘板の音です。どうするか、あなた次第です。

僧 それならば、刻限が過ぎないように我々は行動するでしょう。

立ち上がってぐるっと回って四方を見渡して 見ての通り、蓮のひげ根のような白糸の祭紐に印付けられた黒い胸板の、竹の棒を手にしたどこかのバラモンの若者がこちらに向かってくるぞ。この者が刻限の邪魔を引き起こさないうちに、予定通り行動するでしょう。

信徒 大徳様、かなりの間、このバラモンの若者はここにずっといました。この木のたもとに大徳が腰を下ろしたのと同時に、ここに入ってきた彼に大徳は気づかなかったのです。つる草の茂みの陰になったこの者は、大徳が説いた教えを残らず全て聞いていました。

僧 それならば、どうしてそんなやつで、我々が今、刻限を逃す[必要があろう]か。

と言って信徒と伴に退場

それから、上に示された通りのスナータカと、手下が登場

スナータカ

[私は]ヴェーダを伝統通り学習しておえた。また六つの[ヴェーダ]補助学も検討しておえた。ミーマーンサーを究めた。このように再生族に相応しい義務を為しておえた。しかしだ。常に揺れるひどい思弁で埃まみれになった[しゃがれ]声の《ヴェーダの敵》をへこまさないがぎり、自分の学問の苦労はその務めを果たしていないも同然だ。

そして、ヴェーダを冒瀆する輩の先頭が、この頭の悪い〔仏教徒〕、浄飯王の息子（仏陀）の弟子連中だ。そこで、真っ先に、まずこいつらを、泥棒と同様こらしめてやろう。

ぐるっと歩き回る

手下 ご主人様、沐浴に必要なこの物を私はお持ちしました。沐浴するためにご主人様は出発されたので。

スナータカ だからどうした。

手下 見ての通り都合は良くないです。ご存知の通り、僧院に向かってこの道中の人々がみんな移動しています。

スナータカ では、この僧院にて僧達を見て、それから沐浴しようではないか。

手下 ご主人様の仰せの通り。

両者ぐるっと歩き回る

スナータカ、前を見て なんと僧院の素晴らしいこと。なぜならここには、

御殿は、月の光で白いヒマラヤの頂に競い、マンゴーの森は麗しく、芝で〔下が〕覆われた《つる草の棚》は心を楽しませる。姿を現した蓮の茎で歯を出した、秋の空に似せた〔澄んだ〕水をたたえた蓮池は、蓮の花粉で手足が赤くなった黒蜂の雌達が飛び回っている。

蓮池を見て

下に枝を持ち、上になった広い根を持つ〔水面に〕映った

砂州の木々により、蓮池の水は美を載いている。この〔蓮池の水の〕中には、小枝のあちこちに入り込んだ鳥達が口を広げて、木々の果実片をついばんでいるのが見える。

手下 ご主人様、やわらかい風に揺れている色とりどりの幡布に飾られた須弥山の頂と変わることなき御殿の中に安置された、黄金製の、流れ出す間断なき輝きを放つ美しい色（黄金）の装飾に飾られたこの仏像群の、梅檀・樟脳・サフラン・麝香〔といった〕塗香・花・香煙のお供えの多さを見てください。全く驚きです。

スナータカ、見てから 見ての通り、これは苦行をする衆の草庵の場所ではない。これは王の庭園だ。困ったことだ、ああ、困ったことだ。

道楽者の旅の連れ（仏教徒）に略奪されて、称賛される⁵道ですっかり方向に迷った金持ち達は、様々な財物を、しかるべからざるところに投げ〔捨て〕ている。

この聖典（仏陀の教え）が正しくないとしても、対象の楽から心をそむけ、三昧修習の反復に専心し、何とか命をながらえているとされる者達にとり、このような心静かでない〔粹〕人に相應しい享受を実現する財が何になるう。

手下 ご主人様、見てください。かぐわしい花・香煙の香りの山で一杯に満たされた十方に面するこの白い家の尖塔で、これらの僧達は食事を始めるようです。

スナータカ よく気がついた。で、ひょっとして我々二人を見つけたら、この僧達は自分達の行いが制限されるのを感じるであろう。だからこのまま、つる草の棚で、まずは、彼等に気がつかれないよう、少しの間、彼らの行いを見るところとしよう。

5) テキスト通り vandye ならば、皮肉の意味で「称賛される」道を指す。ただし vandhye の可能性も否定できない。その場合「不毛の」道を指す。

そのように両者する

スナータカ、興味を持って見ながら　なんと、僧団で食事しようとするのに、誰も沐浴もしてないぞ。

手下　沐浴はおくとしても、衣服を着替えもしてないです。

スナータカ、じっと見て　こいつらの漱ぎの仕方もシュードラと変わらないぞ。どうやって四姓の者達が、あるいは種姓が混じったものも含めて、残らずみんな一緒に食うというのか。修行場の掟の何と素晴らしいことよ。

手下　ご主人様、それは、これだけではありません。見てください。給仕しながら食事を布施しようと望む豊満な乳房のこの召使女達の種々の媚態を伴った流し目が、僧達の顔に落ちています。それに、これは、何か飲み物が綺麗な水瓶に入れられて持ってこられましたよ。

スナータカ

酒はここでは「熟した〔果実の〕ジュース」という言葉で隠され別名で呼ばれる。そして食肉は〔見・聞・疑の〕三方〔の条件〕を欠いた〔三方清浄の〕もの〔として許される〕。ああ、苦行の大変なことよ。

手下　ご主人様、よく見てください。この僧ときたら、

喉が渴いているくせに、舌でもって、揺れる水蓮をたたえたい飲み物を飲んでいません。開いた目の召使女達の顔を、視線でもって〔飲んでいる〕ようには。

スナータカ　よし。欲望を離れた者達の、僧院での良き行いは見たぞ。

手下

庭園の中にある住居．そして入手容易な飲み物，食料も入手は容易．そして規制の苦しみは何もない．幸いなるは僧となる者．

スナータカ もう冗談は十分だ．これなるは，かの大学者で有名なダルモッタラという名の僧，食事を終えて御殿から降りてきて木陰の芝の上に座っているぞ．彼に近づいてみよう．

それから示された通りの僧と，信徒が登場．

僧 きみ，慈悲の蔵である世尊菩薩のかの御教えの数々を，君は心に刻んだか．

手下 大徳は，いま一度助けてくださいますように．

僧，前を見て これなるあのときのパラモンの若者は，いまだにじっと[ここに]いたままだ．何か言いたげのように彼の顔は見えるぞ．

スナータカ，近づいて お坊様，ご機嫌よろしゅうございますか．僧院のこの行は，つつがなく行われているでしょうか．

僧 ようこそ．この芝地は問題がない．座ってください．

スナータカ，座ってから で，何をこの者に先生は教示なされたのですか．それについて分ったか尋ねてらっしゃいますが．

僧，信徒に向かって 彼が尋ねていることに答えよ．

スナータカ これは何たる侮辱，「信徒よ，答えよ」とは．手下よ，こいつ（信徒）の言うことを聞け(śṛṇv asya)．

僧 パラモンよ、「この方から聴聞せよ」（śṛṇv asmāt）というのが正しいのではないか。

スナータカ 赤衣の者よ、知っての通り、このようなお喋りは「正規の学習に際して、教師は [apādāna という kāraka]」（Aṣṭādhyāyī 1.4.29）という [規則] の対象ではないのだ。いいか、「役者の [言うことを] 聞く」（naṭasya śṛṇoti）というこの使用（奪格ではなく属格）だけが、ここでは正しいのだ。

僧 なんと口汚い再生族だ。三界の唯一の師である最上の慈悲者たる世尊仏陀の教えを「お喋り」とは。

スナータカ、信徒に向かって おまえも言ってみろ、彼から何を教わったのか。

信徒 もちろん、私は、四つの聖諦を、師匠に教示してもらったのです。苦、集、滅、道です。

スナータカ、微笑して これが、かの最上の慈悲者の御教えだと。それに、無我見が至福への道だと説くようなものはお喋りじゃないのか。

僧 再生族よ、アグニとソーマ等への家畜を屠殺する行為を至福の手段として正しいとする、このような見解の修習に心が汚されているから、あなたのような人たちにとっては、この《最高真理の教示》は、お喋りであるかのように映るのだ。

スナータカ なんと、これなる悪しき行いの仏教徒は、ヴェーダの文章についてまで異議を唱えている。何としようか。誰の前で言おうか。この僧院は墮ちた者の集まりばかりで一杯だ。

四方を見渡して、喜びながら ああよかった。これなるは、僧院の庭園を見ようとして、とても沢山の、ヴィシュヴァールバを始めとする優れた大学者達が審判として、幸運にも、いらっしやる。よし、悪人共を懲

らしめる機会を得たぞ。

それから、できるだけ沢山の審判達が登場 これなるはスナータカのサンカルシャナ、それに、これなるは僧ダルモッタラ、両人は言い争っているかのように、顔艶からすると、見えるぞ。よし、まずは見てみよう。

集会場を彼らはぐるりと回る

僧 ようこそ、あなた方。ここにお座りください。

といて芝地を [僧は] 指差す

審判団、座って 何がここで議論されているのですか。

といて、彼らは僧に尋ねる

僧 これなる祭紐の [バラモン] には、菩薩の教えが、お喋りであるかのように映るのです。

スナータカ

ここに私。そして、これなるは僧。あなた方は賢き審判。正しいか正しくないかを検討するのに、このような機会が他にどうしてありましょうか。

審判団

理に適っており、適量で、定説を種子とする言葉が述べられるのならば 詭弁・誤った論難・敗北の立場に満ちた論議の空騒ぎの [言葉] が回避されるならば 心には嫉妬が全くなく、言葉は荒々しくなく、顔は眉をひそめず 正しき者達の論議がこのようであるならば、これなる

我らは、いつでも審判 [となる準備がある] .

僧とスナータカ あなた方が指示なさった通りに [いたします] .

審判 では、誰が、両人のなかで、最初の主張者(prathamapakṣavādin)なのか .

スナータカ 僧により既に「前主張」(pūrvapakṣa)の提示が、信徒を教える際に為されております .

僧, スナータカに向かって それをあなたは聞いたのか .

スナータカ 聞いたとも .

僧 もしそうなら、繰り返してみられよ .

スナータカ いいですとも . まずはただ簡潔に繰り返しましょう .

苦, それ (苦) の原因, それ (集) の止滅, それ (滅) が成り立つための道, [最後のものは] 無我見と呼ばれる .

それ (無我) の論証は刹那滅性論証に基づく .

その《刹那滅であること》は、《存在であること》に基づく . [またそれは] 消滅にたいして原因が必要でないことに基づく . 想起等という活動は [認識の] 連続にある因果関係に基づく .

刹那滅であるとしても、外界のいかなる対象も、認識の対象となることはない . 形象群に彩られて現れているこの [全ての] ものは認識 [自体] に他ならない .

したがって、一切は空、一切は刹那滅、一切は無我、一切は苦 . と、このように瞑想して人は涅槃に到達する .

僧に向かって これでいいですか .

僧、見下しながら ふむ、簡潔には。

スナータカ それでは、これについて、いまや、[私の意見を]お聞きください。

審判 我ら、注意しておる。

スナータカ

上で述べた通りのこの解脱道は、刹那滅が論証されて[こそ]ありえもしようが、つぶさに検討すると、存在というのは刹那滅性に触れることはない。

僧 どうしてだ。

スナータカ 論拠がないからに他ならない。

僧 論拠は述べたではないか。「存在であるから」と。

スナータカ

《存在であること》という根拠が述べられたが、实例の見られない不毛な[その根拠]について、[刹那滅性との]関係を把握するのは、まっすぐの道(肯定的随伴)では不可能である。煙と火の場合とは違って。

僧 そうだとして何なのか。否定的随伴を通してであっても、遍充の把握は遍充把握に変わりはないのだ。

継起的にも同時的にも[効果的作用を持た]ないがゆえに、常住なものから排除されるその存在性(効果的作用をなすこと)は、ひるがえって、刹那滅のもの[だけ]に、その歩を占めることになる。他の道がありえないからである。

スナータカ

君にとり、遍充するもの〔である継起的・同時的な効果的作用〕の不可能というそのことだけに基づいて、常住なものから〔存在性が排除されるの〕と同様に、〔刹那滅のものは継起的にも同時的にも効果的作用をなしえないという同じ理由で〕刹那滅の諸物からも、存在性はいっそう排除されよう。

見よ。

生起してからもしこの存在が何らかの作用を開始するならば、その場合には、刹那滅とはならないであろう。〔逆に〕自体獲得のただ直後に死に抱かれているならば、その〔存在〕に〔効果的〕作用の機会がほかにどうしてあろうか。

僧 刹那滅の諸物における、実に、これこそ因果関係 「甲に縁りて〔直後に〕乙が認識される」という縁起のみである。

スナータカ この点については、他にも言うべきことはあるが、それは置いておこう。で、次のことを私は主張しよう。この〔仏教の〕見解においては、原因性そのものが真実のものではない。というのも、諸物は特定のものにたいして材料因だからである⁶。

そこ（仏教）では、自らの行為の果報を享受することの正当化など、諸認識上の因果関係に基づく一切が損なわれてしまう。〔かといって〕何らかの因果関係がこれらにあるとするなら、他人の〔認識の〕連続上に生じる別の認識の

6) 単に時間的に無間隔に前後すること ānantaryamātra を本質とする縁起のような弱い因果関係ではなく、他動的な「生み出し」という強い因果関係をニヤヤは主張する。

上にも等しく [因果関係があることになろう]⁷

僧，下を向いて地面を掻く

スナータカ

あるいは、真実のものとして因果関係が成立するとしても、
[行為の主体と享受の主体とで、主体である] 認識が異なることは免れないのだから、どうして自らの行為の結果を享受する [同一] 主体たりえようか。

しかも、「諸物は刹那滅である。存在するので」では、論証対象 [である刹那滅性] とは逆のもの [である非刹那滅性] を論証するので、これは矛盾因である。

僧 どうしてか。

スナータカ 刹那滅のものは効果的作用を為さない、ということは既に述べた。いっぽう、存続する諸物は、補助因が近在する場合に、一度に、あるいは、継起的に、[結果を] もたらしうるのである。というわけで、効果的作用を為す、ということから、そのものの存続することが論証される。

僧，黙ったままいる

スナータカ

また諸物の自体放棄は原因に依存する。自体獲得と同様に、なぜなら、いずれ（自体獲得・自体放棄）についても、肯定的随伴・否定的随伴は同様だからである。

7) 自分の心相続上の認識の直後に生じた他人の心相続上の認識、その両者にまで因果関係があることになってしまう。

僧 いや、消滅の原因について、肯定的随伴・否定的随伴は、[生起の原因の場合とは]別の仕方 で成立している。というのも、それ（消滅の原因とされるハンマー等）は、[瓶等とは]異なる種類の連続 [である破片等]の原因だからである。生起の原因の場合には、肯定的随伴・否定的随伴は、他に結果がないので、それと同じようにはいかない⁸。

スナータカ、微笑しながら 望みによってか、あるいは、憎しみによってか。《他に結果がないこと》というのも、一部の者達の見解では主張できない。というのも、[サーンキヤ等では、原因から生起するのではなく]顕現することなども可能だからである⁹。

僧

生起の諸原因なしに結果が生じるのは決して見られたことがない。

スナータカ

消滅の諸原因なしに結果の消滅するのが、どこかで見られたとでもいうのか。

僧 消滅の原因が近在してないことから、何千万年経っても、いかなる瓶も消滅しないということになるろう。

スナータカ、笑いながら 困ったことだ、全く困ったことだ。瓶が常住なら世間の活動は終わりだ。人類は滅び、世界には、瓶のみが常なる死として存在する！なぜなら、虚空がそうであるように、消滅の原因を持たないものは常住であるとすればよいから。だからといって何だ [というのだ]。しかし、部分を持つものには消滅の原因はないことはない。

8)「原因 瓶の生起」と認めるしかない。

9)「原因 瓶の生起」と同様に、「原因 瓶の顕現」ということも言える。

諸部分の分離等が必ずあるからである。しかも、あー、愚か者よ、あなたの立場においても、瓶の刹那の連続は断絶することなく、同じままに、どうして見えないことがあるのか。異なる連続の原因であるものが、この[連続]にやってくるのだ、というならば、よし、消滅の原因も、私の立場では、同じように、[外から]やってくるとすればよいので、[私とあなたとは]行き方は同じとなる。すなわち、以上のようなものが刹那滅の立場である。

僧，恥かしそうにいる

信徒 おいおい、悪しきバラモンよ、どうして大徳をお前は辱めるのだ。

手下 おいおい、種姓の混じった者、先生に、こんな風な態度を取るのか。

信徒 誰にとってこいつが先生なんだい。駱駝面のこいつにとってだけだ。

手下、怒って立ち上がり、信徒の顔に平手打ちを落とそうとする

スナータカ、僧，審判 まあまあ、そんなに興奮しなくても。

といて遮る

スナータカ しかも、存続を把握する「これはあれと同じものだ」という再認識によって、この理由は拒斥されている。あるいは、再認識は置いておくとしても、目を閉じてない人にとっては、その存在性がいまだ碎かれていない[存続する]ものとして対象を把握するこの知覚、それも、やはり拒斥するものに他ならない。そして、そのような知覚があるにもかかわらず、或る愚か者達が、知覚は刹那を把握すると主張するなら、それも否定されてしまっている。刹那が長時間あることはありえないし、また、今現に、そのように[長時間あるものとして]把握されて

いるからである。

審判 詳細はもうよい。

汝が説明した耳に心地よいこの論理の道を、スナータカよ、
[我々は]聞いた。それによって刹那滅論は排斥された。
では[唯]識論について少しばかり述べよ。

スナータカ 僧よ、聞かれよ。

把握対象と把握主体という両者[の形象]が[同時に]認識されるということはあってはならない。では、認識を本質とするもの(把握主体)が照り輝くとして、それが露わにするのは、それ自体の形象なのか、あるいは、他のものの[形象なの]か。「私は青である」という認識はない。そうではなく「これは[青である]」というこのような《認識それ自体との》区別を踏まえた認識が、他者(外界対象)について当てはまる。したがって、この把握対象は、外界のものとして確実に存在する。

僧 もし存在するなら、どうして意識されないのか。

スナータカ 誰が「意識されない」と言ったか。「これは青である」と現に意識されているではないか。

僧 良き者よ、これ(「これは青」)は認識の立ち現れである。というのも、認識は輝き出し(精神)を本質とするからである。これは対象の立ち現れではない。それは無情[な物質]を本質とするからである。そして、両者がともに立ち現れることのないことは君も述べているところである。

スナータカ 認識といえども、輝き出すときは、他にとつての輝きとしてのみ輝くのであって、それ自体にとつての輝きとしてではない。なぜ

なら、この輝きは、《輝き出させられる [客体] にとっての輝き》であって、単なる《輝き [それ自体] にとっての輝き》ではないからである。というのも、これこそが光の有り様だからである。それを述べて、

[認識・言葉・灯火という] 三つの輝きが自他にとっての輝きである。

と。しかし、その時、真実には、認識 [それ自体] が輝き出すのではない。なぜなら、青等という形象が輝き出すからであって、認識というのは、青等という形象を持たないからである。肯定的随伴・否定的随伴により、それ（青等という形象）は、[個々の牛が] 牛性 [を持つと確定されるの] などと違って、認識を本質とするとは確定されないからである。

僧、黙ってうつむき地面を掻く

スナータカ では、審判団の皆様、仰ってください。どちらの側が優れていますか。

審判団 どうして我々に問うのか。沈黙せる僧により既に、あなたの立場は確立されている。

スナータカ では、我々は、いまや、沐浴に行くとします。失礼いたします。あなた方も見世物を見てください。では、ご自由になさってください。

僧に向かって

僧共よ、もしも、あなたのこの苦勞が [純粹に] 来世のためならば、やめなさい。それとは逆の効果を生むこのようなものは必要ない。もし、この努力が、偽善詐欺の空騒ぎに依る、処世のためのものならば、好きなようにするがよい。

とって、全員、退場

第一幕（終了）

（訳：片岡 啓）